

4 歩みをたどる

アイヌ民族による演説会のポスター

明治時代になり、日本が北海道の開拓を進めていくと、アイヌ民族の生活と文化は、多くの打撃を受けました。アイヌの人びとは、このような厳しい条件のなかで、くらしを切り開こうとしてきました。この写真は、1930年ごろ、アイヌ民族の青年たちが、札幌の時計台で演説会を開くことを知らせるポスターです。ポスターには和人たちの差別的なアイヌ観を改めるよう求める主張や、アイヌ民族に対する施策の問題点を問いただす主張などが書かれています。

明治政府は、北海道を日本の領土に入れ、開拓を進めるなかで、土地や川などの利用を厳しく制限しました。このため、それまで主に狩猟や漁で生活してきたアイヌ民族のくらしは大変厳しくなりました。街がつくられたり、屯田兵^{とんでんへい}が入ってきたりしたことをきっかけに、アイヌ民族がそれまで住んでいた土地から無理やり移された地域もあります。さらに1890年代になると、北海道のほとんどの地域にたくさんの移住者が入りこむようになり、北海道のどの市町村においても、移住者の人口がアイヌ民族をはるかに上回っていきます。アイヌ民族の伝統的な生活を一方的に否定する同化政策の圧力もいっそう強まりました。

くらしを取り巻く、さまざまなものが変わっていくなかで、アイヌの人びとは、新たな時代を生きる努力を積み重ねました。農業や漁業に力を入れた人たちは各地にみられます。子どもにしっかりした教育を受けさせるため学校の設置などを積極的に進めた人や、もともと住んできた土地の権利を求める運動を行った人もいます。1910年代になると、日本語による言論活動も活発になり、新聞や雑誌には、アイヌに対する差別や偏見をただそうとする意見や、自分たちの将来を論じる意見がみられるようになります。アイヌによる著書や、アイヌの有志による雑誌も発行されはじめました。

一方で、日露戦争やアジア太平洋戦争にはアイヌの男性も徴兵され、戦争を支えるために多くの人びとが動員されました。

日本の敗戦後、民主化などが進むなかで、アイヌの人びとは、土地や生活を守る運動を起こしました。1960年代後半ごろからは、広く社会や政治のあり方を問う議論や、アイヌの文化をとらえ直す機運が高まり、アイヌ自身による伝統文化の記録や保存、継承の動きもみられるようになります。

このような、明治、大正、昭和を歩み続けた歴史が、現在につながっています。



歴史のなかのアイヌ民族の〈声〉

近現代の歴史のなかのアイヌ民族の〈声〉を聞いてみましょう。

ゆっくりと、言葉を噛みしめるように演説しているのは1946(昭和21)年に設立された「北海道アイヌ協会」の初代理事長である向井山雄^{むかい やま お}です。協会はこのころ、宮内省が管理していた広大な牧場の土地をアイヌに返してほしい、と要求していました。農業や漁業が主な職業であるアイヌ民族の生活の基盤を築く必要があること、そのためにももともとアイヌがくらししてきた土地であるこの牧場の返還が必要だ、と訴えています。

もう一人の声は、サハリン^{からふと}(樺太)出身の西平喜太郎^{にしひら き た ろう}です。1905(明治38)年、日露戦争に勝利した日本はサハリンを領土とし、サハリンのアイヌやウイльтаなどの先住民族も、日本の統治下に置かれました。しかし日本が戦争に敗れサハリンから引きあげたため、アイヌやウイльтаの人たちも、多くは北海道へ移り住むことになります。サハリンを脱つまでの苦労に加え、新たな土地でくらしを築かなければならない困難。この回想では、その一端が語られています。